

特定非営利活動法人 日本免疫学会  
2023 年度 前期 Tadimitsu Kishimoto International Travel Award  
研究発表報告書

申請者氏名	田山 舜一	会員番号	0035353	
申請者の所属・職名	東北大学 大学院医学系研究科 免疫学分野 助教			
出席会議名	IMMUNOLOGY 2023			
発表論文タイトル	Reactive persulfide controls intestinal inflammation by suppressing CD4 <sup>+</sup> T cell proliferation			

実施結果:

この度は、令和 5 年度 Tadimitsu Kishimoto International Award に選出いただき、誠に有り難うございました。また、岸本忠三先生、選考委員の皆様ならびに推薦して下さった石井直人先生に深く感謝申し上げます。

申請者は、2023 年 5 月 11 日～5 月 15 日にワシントン DC にて開催された IMMUNOLOGY2023 に参加し、上記タイトルにて口頭・ポスター発表させていただきました。今年度開催された IMMUNOLOGY2023 は、新型コロナウイルスによる各種規制の反動もあってか、過去 10 年間で 2 番目に多い演題提出がなされ、学会会場は多くの研究者で賑わい活気に満ち溢れていました。本会にて申請者は、活性イオウ (reactive persulfide) が CD4<sup>+</sup> T 細胞の細胞増殖を抑制することで大腸炎発症に対し保護的に作用することを報告し、オーディエンスとの意見交換を行いました。全体的な印象として、reactive persulfide は最近発見された代謝産物であることから、初めて耳にする方が大半であり、活性イオウについて認知してもらう良い機会になったのではと思います。一方で、僅かではありますが、イオウ代謝を専門に研究されている方もおり、reactive persulfide の発見者である赤池孝章先生のお元で学ばれた Mohammad Samiul Alam 先生 (現 FDA) にお会いすることができ、イオウ代謝の観点から貴重なアドバイスをいただく事ができました。その他にも、イオウによるミトコンドリア機能制御機構について研究されている先生から未発表の内容を聞くことができ、大変有意義な学会発表となりました。

学会参加後は、NIH に赴任中の河部剛史先生に NIH やワシントン DC を案内していただき、アメリカの町並みを堪能しました (写真: NIH 敷地内にいる Canada goose の群れ)。市街地はコロナに対して寛容な状況で、地下鉄などでもマスクを着用した方は見られず、同時期の日本に比べコロナウイルスを気にしている方は少ないように感じました。対照的に、研究施設である NIH Clinical Center (Bldg10) では、病院に隣接した研究拠点であるためか、「医療関係者ではない研究者にもマスク着用の義務がある」「食堂の座席は間隔を空けるスペースが存在する」など、新型コロナウイルスに対する規制が敷かれており、現地の状況を肌で感じる良い機会となりました。



今回の国際学会は、私にとって初めての海外渡航であり、文化的違いに驚かされることばかりでしたが、ハイレベルな環境に触れ研究者としてのモチベーションを大いに高めることができました。学会参加で得られた経験を糧に、独立した研究者となるため一層励んで参りたい所存です。